

スターリン主義打倒、反スタマルクス主義止揚、革命的マルクス・レーニン主義復権の旗を更に高く掲げ、国際非合法党を建設せよ！

赤報

1986年4月20日 発行
共産主義者同盟 (RG)
第45号 250円 発行人 野村 忠

寄せ場の闘いの社会化と市民社会批判

はじめに—テロルと社会化

七〇年代以降の寄せ場労働運動の歴史を指導する山岡氏、一氏に対する階級敵の凶弾に、プロレタリアートは必ず報復の回答を出さなければならぬ。八四年一月二日の佐藤満夫監督に対する虐殺に続く、この八六年一月三日の「利息」(魯迅)は重い。
山岡氏は、山谷現閣委結成、日雇全協結成などの中心にいて、つねに第一線で闘いぬくことも、寄せ場の闘いが生んだすぐれた理論的指導者であった。警察は下手人の日本国粋会金町一家に、山岡氏を標的として殺していた。
映画「山谷」やられたらやりかえせ」の完成をひきかえに、二人に対する白色テロルは、直接的には右翼政治結社化しての暴力団の武装・寄せ場の闘いの労働運動へのせん滅攻撃、それを尖兵としての行政・地域ボス・警察による地域支配の完成、「地域浄化」、建設業における国策事業への労働員・管理職の下請争議圧殺などを実体的契機としている。
そして、日本帝国主義の国際的な権力設定が、市民社会の成熟にその道具立てをおこなうこととして、労働組合運動の体制機構化、天皇在位六〇年式典、臨教審などで、その「制度としての政治」を編みあげることによって進んでいることが、反革命階級利害の情勢背景の一致を支持している。
「われわれはしかし、山岡氏の「死の意味」に関するじよ舌を自らに抑えよう。われわれは佐藤さんの死に対する関心に対して、その人の人格を尊重する

この提起と「山谷の闘い」をどこまで社会化できるか(「反撃」の「葬列」四二頁)という問題意識とを、結びついたものとしてとらえるべきである。山岡氏の到達地帯はそれよりなものであったとわれわれは考える。
そうすれば、山岡氏虐殺の政治的位置と山岡氏の人格とは、
この「闘いの社会化」ということにおいて、まずまず結びつくのではない。前者における階級敵の利害一致がとりわけ「闘いの社会化」に牙をむいたものとして、プロレタリアートにはつきりと刻みこまれている。
山岡氏が映画「山谷」についてのインタビュー「カメラは常にこの「闘いの社会化」ということにおいて、まずまず結びつくのではない。前者における階級敵の利害一致がとりわけ「闘いの社会化」に牙をむいたものとして、プロレタリアートにはつきりと刻みこまれている。
山岡氏が映画「山谷」についてのインタビュー「カメラは常にこの「闘いの社会化」ということにおいて、まずまず結びつくのではない。前者における階級敵の利害一致がとりわけ「闘いの社会化」に牙をむいたものとして、プロレタリアートにはつきりと刻みこまれている。

(一) 寄せ場の歴史性と市民社会

① 運動分析史に対して

山岡氏は寄せ場の現場闘争と組合運動との経緯から、組織論的な三つの領域の有機的結合を主張している。
「三つの領域」というのは、労働者にとって最低の抵抗の基礎としての組織が必要だろうという点で、それはまず組合みという形になる。その上に上部闘争を闘える、そういうことを

「階級の成熟」異論の検討

前号一面論文に読者から意見が寄せられている。意見は階級の成熟の節にたいし、次のように批判する。
「(一) 筆者は①労働者大衆が資本に対して階級であるということ、②労働者大衆が大衆自身のための階級に自己を構成しているかどうかということ、③階級に自己を構成していることと、④階級の成熟(国民文庫版哲学の貧困、二二頁参照)階級の解体」論者が①をも否定する意味に階級という言葉を使っているという限りでは筆者の主張は正しいが、労働者階級の利益が資本家階級のそれと根本的に対立している(「意識がきく」となっている)とすれば、階級が成熟しているとはいえない。階級の成熟という言葉はマルクス主義において②の意味で使われるが普通であり、筆者の主張は転倒している。
この意見が②の意味として、この内容については、マルクスは「哲学の貧困」では「大衆自身のための階級」としている。しかし「共産党宣言」では、

「プロレタリアートは、ブルジョアジーとの闘争において必然的にみずから階級に結合し」と述べられ、さらに「プロレタリアートは階級として行動し、この階級を継承しようとする」とある。これらからわかるように、意見が②の意味として、この内容については、マルクスは「哲学の貧困」では「大衆自身のための階級」としている。しかし「共産党宣言」では、

革命の社会的な精神という、今日われわれが提起している政治的内容は、今日の大衆の自然発生性から革命の政治的精神としてあることについての指し示を含んでいる。労働者階級の成熟から自発的に形成されるという労働組合や労働者諸階級の展開する政治が革命の政治的精神であること、このことはマルクスが生きていた時代に、すでに労働組合が体制内化していたという事実にも見られるので、だからマ

自然発生性目的意識性

共産主義者の目的意識性

このように考えると、前号一面論文が①の意味での階級の成熟について分析したことは、今日共産主義者が大衆の自然発生性と闘争するために必要とする内容の政治的宣伝・煽動を行わなければならないか、ということへの回答を準備しようとするものであることがわかるだろう。
ルクスは「労働組合の組織などなくとも、インテリゲンチヤルは労働者をひっぱってゆける」(全集17巻、六一九頁)と述べてもいるのである。
さらにまた、意見のように、マルクス・レーニン等の著作が書かれた時代の歴史的事実とつぎあわせてその内容を理解しようとするならば、ドイツ社会民主党を中心とした第二インター主義派に対するレーニンの闘いを今日に継承し、第一インター

訂正

前号(44号)の「一」四面論文の見出しに誤りがあるので次のように訂正します。
(誤)「農業の生産力と資本輸出」
(誤)「農業の生産力と資本輸出」
(誤)「市場化と農業技術交換」
(正)「市場化と農業技術交換」

「下層主義」と階級規定

① 主体概念としての検討

階級規定としての流動的下層論について、われわれは主体概念したがって階級概念として把えることが正しいと考えている。このことは、日雇全協の結成にあたって組合主義傾向批判とともになされた、いわゆる「下層主義」総括についての共通認識によっても確かめられる。公表されたもので釜日労・争議団の主張をひくならば、すなわちそれは、七〇年代の寄せ場の闘いが「流動的下層労働者」の解放闘争として位置づけられた背景を、次のようにおさえて

「日本が帝国主義としての侵略体制を確立していく過程の中で大量の寄せ場労働者、又それを含むところの下層労働者群が形成されて来たこと、又、侵略が本格化する中で海外からの超過利潤が「労働」が右傾化したきた物質的基盤であり、このことに対する批判としての意味が含まれていたのである。」「日本読書新聞」(二二四号)

それゆえに単に「労働の一翼」と位置づけ直すだけでは、どのように交流し、何をもちって連帯

いかぎり、限界を突破しえず後退する以外にない(七〇頁)として、組織を位置づけている。そこでは暴動とからみ合わせの運動の発展段階が三期区分され、現状を「左翼組合主義者が暴動を圧力闘争にすり変えた」という第三期の運動の延長であるとしている。

「これは次の新しい運動を準備している。それは……組合運動とは異なる、叛乱を追求し、叛乱を貫徹し、叛乱を権力にまで高めようとする、非日常を日常化しようとする潮流である。まさしく意識分子の大衆運動が大衆暴動と合体しさらに大衆暴動が都市人民戦争として拡大・深化する建軍・建軍の運動である。」(同)

つまり、労働者権力の樹立にむかっている大衆暴動、革命戦争

の客観的前提条件があるが、組合主義が圧力闘争にすり変えているので、叛乱と合体をめざして「意識分子の大衆運動」が展開されれば革命闘争の発展が実現する、といったような認識がここにあると言えよう。政治が「労働者の闘いの道徳性」という規定にとどまっていたら、いとも容易く、これが、遊撃戦「総力戦体系」における非合法の領域にふみこんだときにおける理念上の限界をもつていた、というのがわれわれの考えである。

その領域では、かの認識は戦闘のイデオロギーにならざるをえないであろうということである。遊撃戦の領域が大衆運動にいたっていない日本階級闘争の条件のなかで、暴動の根拠と遊撃戦の根拠とが混同されてい

れば、それは非合法主体にとつて致命的である。なお、釜共闘・現闘委がよって立つた運動論の幹について、山岡氏の述べていることを引いておく。

「六八年六・一七、七・一九暴動によって、運動の力の発揮しようとしては暴動を起せる、というところを知った以上、問題は暴動として噴出する内発の根拠を握り、そこに運動の根を下さすことが求められる。……内発の根拠とは、資本と対決する現場を闘争の場として組織すること、労働現場であり、その現場への動員のされ方である。」(前同書二七頁)

運動の根の点で「総力戦体系」論は、体系たつたか欠陥をもつていたと言えよう。

ていくならば、このような質規定がどのような問題をあらわしているかという点とともに、他者との主体概念の違いという客観的があるなかで「下層主義」総括の二つの実践という途がひらけるところを、その実践的必要性は言うまでもないが、その「落差」が実際に異なった主体概念をもつて存在しているのが現実である。

だから、「戦士団結」の質を規定するものとしての「流動的下層」を主体概念としておさえて

本工一臨工・社外工一雇といたった労働力の複層的な階層編成は、資本に対する本工組合の協同の材料であったし、自動車工場などでライン長大化、集中制、標準作業システム、徹底といった、濃密度に労働を搾りつくす労働管理システムの確立(六〇年代「高成長」)によるものであった。

そして資本による労働編成によって寄せ場に回流するのは、資本の要請に従って売られ売ら

② 労働力の差別商品化

閉山炭坑・合理化からの労働者群であり、被差別部落、在日朝鮮人、沖縄、奄美人、アイヌである。流動的下層の主体概念は商品のこうした属性によって労働力の流動を船本氏が説明しようとするとき、労働力の売買(貨幣との交換)についての見方の特徴をみい出さざるをえない。つまりは労働力の売買という形式の具体化である。

もちろん資本もまた商品であり、その独特の生産力編成をたえざる変更に運動におく動因を

その蓄積様式の発展のなかにもつている。この資本の商品としての編成替えが労働力の吸引と反撥をもたらす。労働力の商品としての実現問題における差別化をもたらしめている。

商品・資本関係の批判ではこのように流動的下層労働者は「市民」的労働者の概念に対するものである。今日のME化、ロボット化という事態の進行は生産的労働者がますます「マイノリティ」化されるという現象として、「市民」的労働者の階層制を強めている。これはとりもなおさず労働の差別の編成がよ拡大することである。

固定的な「市民」的労働者層は、資本主義の内部市場拡大から、労働者層の成熟として現れたものである。それは生産的労働において、熟練の養成と蓄積が企業内でなされ、企業内では効率にあわなないものは外注されるという、労働の質の量的管理からの現象でもあった。

新たな技術商品によってこうした労働の質の管理が変容してくるとともに、寄せ場における日雇保険の手帳金融が登場するなど、流動的と「市民」的との区別性・同一性はますます動かないものとして教条化するわけにはいかない。戦後五〇年代の全日自労の失対事業確立闘争が労働者層の確立を要求するものであったとすれば、暴動を出发点とする寄せ場の労働運動にも、先の傾向は作用するであろうということである。

そして「商品は本質的に流動的である」という命題に対しては、商品がそうであるのはW・GとG・Wにおいて次々とその姿をかえらるることによって、これは一般の価値形態および貨幣形態への必然性が商品にひそんでいながら他ならない。

商品のこうした属性によって労働力の流動を船本氏が説明しようとするとき、労働力の売買(貨幣との交換)についての見方の特徴をみい出さざるをえない。つまりは労働力の売買という形式の具体化である。

もちろん資本もまた商品であり、その独特の生産力編成をたえざる変更に運動におく動因を

寄せ場労働者の階級規定を具体的に述べよう。人間の型論のよきなことは最近の社会的左翼論者においても言われているが、船本氏のそれはあくまでも寄せ場の闘いがもつ暴力性の根拠、野たれ死の状況を対象化しようとするものである。

いわゆる「下層主義」はしたがって、主体規定の社会性がさしあたり政治思想におけるヘゲモニー主義に依って立っていたものと見ることができよう。

こうして市民社会批判がいかなるものか、検討を進めなければならない。船本氏は「資本主義国家の歴史的特質」論のところで「生産過程における搾取と被搾取という階級支配の基本的構造が商品経済過程におおわれ、階級支配が直接目に入らぬようになっている」として次のごとく述べている。

「労働者は痛みを訴えるが、首を絞めている元凶がほんやりしてはつきりわからない。資本主義国家は商品経済秩序(普通「市民」秩序と呼ばれている)を維持することによって自動的に生産過程における搾取を貫徹することができるといって、世界史上もつと巧妙な階級国家なのである。」(二七頁)

商品経済秩序を維持することによって搾取を貫徹することによって自動的に生産過程における搾取を貫徹することができるといって、世界史上もつと巧妙な階級国家なのである。」(二七頁)

商品経済秩序を維持することによって搾取を貫徹することによって自動的に生産過程における搾取を貫徹することができるといって、世界史上もつと巧妙な階級国家なのである。」(二七頁)

規定を深化することは運動の継承性に対する大きな支柱であるというところである。ちなみに寄せ場は労働力商品の差別的市場として、市民社会の一部なのである。

現象することを、船本氏はこのように述べて、それに対応して抗議が「持てる者」に対する嫉妬・羨望として現象するが故に、市民社会を維持するとして、市民秩序を維持するとして、その幻想の形式としてあげられているものは、①議会政治②評等の組合運動③持株制度④消費者信用をつうじての文化、といったものである。

ところで政治的国家と市民社会との分裂は、とりもなおさず政治的公民の生活と市民社会の私人の生活との二元化を意味している。このこと自体が幻想性をもたらすのであるが、市民社会は「諸個人の相互関係が権利である(マルクス)」「ユダヤ人問題によつて」マルクス、ユダヤ人の諸個人に解消してあり、その成員は自然として現われている。法人・政治的公民の生活が独立の諸個人の相互関係にとつての手段となるのは、ここからである。こうした自然人が「幻想」のブルジョア的前提である。

「制度がこれらの下層労働者の居住区に対し、資本家秩序にくりつけられるための幻想の形式を与え、それができないという事実から、そこには「市民社会」における隠蔽された支配と被支配の関係を、道徳」と倫理」の間の関係のかわりに「警察権力」と右翼暴力団による暴力の直接支配が存在している。」(二八・二九頁)

「市民社会」として「市民社会」な商品売買者として立ち現われ、階級関係が没階級的に「持てる者」と「貧しい者」として現象する(同)

マルクスの市民社会論は、物質的な諸生活関係の総体を市民社会と規定するものである以上、単純流通の部面からなる商品世界につきるものではなかった。商品世界における人々の社会関係と、資本・賃労働関係における人々の経済的な関係は、その市民社会論において、同等な意義をもっているのである。

だから、マルクスの市民社会論とは何よりも階級論であり、その内容についてはすでに第二章で明らかにしてきた。

ところで、今回、商品世界に焦点をあてて、マルクスの市民社会論の内容をさぐってきたことにはそれなりの理由がある。というのは、市民社会のこの領域における経済的関係が政治的・国家的原理を形成し、通常人がこの政治的国家への反映を市民社会の原理そのものと把握する、という倒錯視が存在している。で、さしあたりは、商品世界に限定して、一般的に信じられる諸個人に解消してあり、その成員は自然として現われている。法人・政治的公民の生活が独立の諸個人の相互関係にとつての手段となるのは、ここからである。こうした自然人が「幻想」のブルジョア的前提である。

「制度がこれらの下層労働者の居住区に対し、資本家秩序にくりつけられるための幻想の形式を与え、それができないという事実から、そこには「市民社会」における隠蔽された支配と被支配の関係を、道徳」と倫理」の間の関係のかわりに「警察権力」と右翼暴力団による暴力の直接支配が存在している。」(二八・二九頁)

「市民社会」として「市民社会」な商品売買者として立ち現われ、階級関係が没階級的に「持てる者」と「貧しい者」として現象する(同)

③ 社会性の再規定の必要

寄せ場労働者の階級規定を具体的に述べよう。人間の型論のよきなことは最近の社会的左翼論者においても言われているが、船本氏のそれはあくまでも寄せ場の闘いがもつ暴力性の根拠、野たれ死の状況を対象化しようとするものである。

いわゆる「下層主義」はしたがって、主体規定の社会性がさしあたり政治思想におけるヘゲモニー主義に依って立っていたものと見ることができよう。

こうして市民社会批判がいかなるものか、検討を進めなければならない。船本氏は「資本主義国家の歴史的特質」論のところで「生産過程における搾取と被搾取という階級支配の基本的構造が商品経済過程におおわれ、階級支配が直接目に入らぬようになっている」として次のごとく述べている。

「労働者は痛みを訴えるが、首を絞めている元凶がほんやりしてはつきりわからない。資本主義国家は商品経済秩序(普通「市民」秩序と呼ばれている)を維持することによって自動的に生産過程における搾取を貫徹することができるといって、世界史上もつと巧妙な階級国家なのである。」(二七頁)

商品経済秩序を維持することによって搾取を貫徹することによって自動的に生産過程における搾取を貫徹することができるといって、世界史上もつと巧妙な階級国家なのである。」(二七頁)

商品経済秩序を維持することによって搾取を貫徹することによって自動的に生産過程における搾取を貫徹することができるといって、世界史上もつと巧妙な階級国家なのである。」(二七頁)

規定を深化することは運動の継承性に対する大きな支柱であるというところである。ちなみに寄せ場は労働力商品の差別的市場として、市民社会の一部なのである。

現象することを、船本氏はこのように述べて、それに対応して抗議が「持てる者」に対する嫉妬・羨望として現象するが故に、市民社会を維持するとして、市民秩序を維持するとして、その幻想の形式としてあげられているものは、①議会政治②評等の組合運動③持株制度④消費者信用をつうじての文化、といったものである。

ところで政治的国家と市民社会との分裂は、とりもなおさず政治的公民の生活と市民社会の私人の生活との二元化を意味している。このこと自体が幻想性をもたらすのであるが、市民社会は「諸個人の相互関係が権利である(マルクス)」「ユダヤ人問題によつて」マルクス、ユダヤ人の諸個人に解消してあり、その成員は自然として現われている。法人・政治的公民の生活が独立の諸個人の相互関係にとつての手段となるのは、ここからである。こうした自然人が「幻想」のブルジョア的前提である。

「制度がこれらの下層労働者の居住区に対し、資本家秩序にくりつけられるための幻想の形式を与え、それができないという事実から、そこには「市民社会」における隠蔽された支配と被支配の関係を、道徳」と倫理」の間の関係のかわりに「警察権力」と右翼暴力団による暴力の直接支配が存在している。」(二八・二九頁)

「市民社会」として「市民社会」な商品売買者として立ち現われ、階級関係が没階級的に「持てる者」と「貧しい者」として現象する(同)

マルクスの市民社会論は、物質的な諸生活関係の総体を市民社会と規定するものである以上、単純流通の部面からなる商品世界につきるものではなかった。商品世界における人々の社会関係と、資本・賃労働関係における人々の経済的な関係は、その市民社会論において、同等な意義をもっているのである。

だから、マルクスの市民社会論とは何よりも階級論であり、その内容についてはすでに第二章で明らかにしてきた。

ところで、今回、商品世界に焦点をあてて、マルクスの市民社会論の内容をさぐってきたことにはそれなりの理由がある。というのは、市民社会のこの領域における経済的関係が政治的・国家的原理を形成し、通常人がこの政治的国家への反映を市民社会の原理そのものと把握する、という倒錯視が存在している。で、さしあたりは、商品世界に限定して、一般的に信じられる諸個人に解消してあり、その成員は自然として現われている。法人・政治的公民の生活が独立の諸個人の相互関係にとつての手段となるのは、ここからである。こうした自然人が「幻想」のブルジョア的前提である。

「制度がこれらの下層労働者の居住区に対し、資本家秩序にくりつけられるための幻想の形式を与え、それができないという事実から、そこには「市民社会」における隠蔽された支配と被支配の関係を、道徳」と倫理」の間の関係のかわりに「警察権力」と右翼暴力団による暴力の直接支配が存在している。」(二八・二九頁)

「市民社会」として「市民社会」な商品売買者として立ち現われ、階級関係が没階級的に「持てる者」と「貧しい者」として現象する(同)

うして生れた市民社会論は実は政治的国家的原理に反映されている限りでの市民社会でしかなかったのであった。

(六面10段より)

転成をなく平田説は法的現象から市民社会の経済的関係をランクつけしているのだから、この市民社会論は、物

こうして自由・平等は、商品世界の経済関係の全体的な反映ではなく、その部分的な関係の反映であることが示されたのである。

こうして、市民社会論者の誤りと、彼らが何故誤りをおかすことになったか、という理由が明らかにされた。

と同時に、平田らの市民社会論者を批判するに当り、林直道のように、自由・平等な市民社会なるものは「ブルジョアの觀念にすぎない」「史的唯物論と経済学」上(二三頁)と言ってみても、全然批判になつていないことがわかる。

それはブルジョアの觀念だといつても、デマや幻想のたぐいではなく、政治的国家的原理であり、そういうものとして、単純流通の部面を不可欠のものとして含む資本主義的生産様式によって生産され再生産されているのである。そして、この政治的国家的原理が市民社会の原理と倒錯視され、市民社会論者の見解が生じている以上、単純流通の部面に限つてみても、市民社会の経済的関係は自由・平等ではないことを示さねばならなかったのであった。

④ 市民社会論の復元のために

共産主義18号 1,200円

- 第一部 RG総括論集
- 第二部 資料篇
- 第三部 国際的党派闘争

共産主義19号 750円

- 第一部 「資本論」第三巻の研究
- 第二部 朝鮮民族主義と「脱亜入欧」

他方の「市民」的労働者における階級闘争の契機を、社会性というところから「発見」していくことの困難をもつている。

(文責・岩木九郎)

共産主義18号 1,200円

- 第一部 RG総括論集
- 第二部 資料篇
- 第三部 国際的党派闘争

共産主義19号 750円

- 第一部 「資本論」第三巻の研究
- 第二部 朝鮮民族主義と「脱亜入欧」

他方の「市民」的労働者における階級闘争の契機を、社会性というところから「発見」していくことの困難をもつている。

(文責・岩木九郎)

共産主義18号 1,200円

- 第一部 RG総括論集
- 第二部 資料篇
- 第三部 国際的党派闘争

共産主義19号 750円

- 第一部 「資本論」第三巻の研究
- 第二部 朝鮮民族主義と「脱亜入欧」

他方の「市民」的労働者における階級闘争の契機を、社会性というところから「発見」していくことの困難をもつている。

(文責・岩木九郎)

共産主義18号 1,200円

- 第一部 RG総括論集
- 第二部 資料篇
- 第三部 国際的党派闘争

共産主義19号 750円

- 第一部 「資本論」第三巻の研究
- 第二部 朝鮮民族主義と「脱亜入欧」

他方の「市民」的労働者における階級闘争の契機を、社会性というところから「発見」していくことの困難をもつている。

(文責・岩木九郎)

共産主義18号 1,200円

- 第一部 RG総括論集
- 第二部 資料篇
- 第三部 国際的党派闘争

共産主義19号 750円

- 第一部 「資本論」第三巻の研究
- 第二部 朝鮮民族主義と「脱亜入欧」

他方の「市民」的労働者における階級闘争の契機を、社会性というところから「発見」していくことの困難をもつている。

(文責・岩木九郎)

第二章 国家の「共同性」とは何か

(一) 市民社会における社会統合力

昔が政治的国家的原理を市民社会の原理と切り替えたがために多くの混乱に陥っていることについてはいろいろ指摘することとはやめておこう。

問題は昔が国家のなかに在りし求めた階級支配、社会の統合イデオロギー、差別構造、この二つは実は全て市民社会にあるところにある。

吉本が共同幻想といふ、昔が国家の統合性、ないし共同性と呼んでいる国家にそなわっているとは、市民社会にそなわっているイデオロギーの反映にすぎない。ところがイデオロギーは、市民社会に社会統合力が存在することを把握していないので、この統合力が国家に反映する、それを国家に内属するイデオロギー的な力とみなしてしまつてしまつた。

(二) 市民社会の諸物神の役割

市民社会にある社会統合力の存在を見失なわすてしまつたものこそ、市民社会における商品・貨幣・資本の物神性である。

市民社会において人々が労働生産物を、商品・貨幣・資本としてあつかう時、労働生産物は単なる自然物ではなく、私的諸労働の社会的形態としてある。

この社会的形態とは、個々の千差万別の労働生産物が、人間の労働として同じものであることを示すことによつて成り立っているが、それは、諸労働生産物がみな単一の労働生産物と同等であるという諸物象の社会的関係を形成して、その単一の労働生産物を抽象的人間労働の直接の実現形態とすることによつて、この単一の労働生産物が、金で固定化されると、金が貨幣と

(三) 諸物神と政治

市民社会の物神性については、国家論を展開しようとする者なら誰でも論じてしかるべきであるが、しかし少数の試みしかなく、そしてこの物神性を市民社会の社会的統合力として扱え、それをブルジョア政治の原基と捉える試みはまだ成功例をもっていない。その原因はそもそも物神性の扱え方に問題があつたからであつた。

物神性はマルクスによつて、宗教とのアナロジーで説明され

家によつて組織された抑圧的な身体性であり……国家によつて組織されることのない解放された身体性、差別の習俗を根こそぎにした身体性を獲得(同書、四三頁)ということが要求して、眼前にある革命的社会的精神の扉を開けることをためらい、革命的政治的精神の領域をさまよひ歩いているのである。

四三頁)することを要求して、眼前にある革命的社会的精神の扉を開けることをためらい、革命的政治的精神の領域をさまよひ歩いているのである。

この点が私的諸労働の社会的形態とは、抽象的人間労働相互の関係なのであるが、この関係は感性では扱えられない。だから、この関係を借した物象相互の社会関係は、人々の眼には、自然物の社会関係に見える。貨幣金に全ての商品を購入する力が宿つてゐるのは、他の全ての商品がみな金と同様であることにもつて、相互に人間労働としての同等性を表現してゐる、という、物象相互の社会関係に由来する、金に人間労働の同等性が表現されてゐることとは感覚ではつかめないから、この物象が自然物に見える、物象の、つまりは人々の一定の社会的関係が生みだしている社会的な力が、金という自然物に生れながらにそなわつてゐる社会的な力に見える。

同じ物神性は資本にもあるが、例えは利子生み資本では、資本の利潤の一部分である利子を得るというところが、一定額の貨幣を所有することの帰結としてあらわれるので、そこには資本の生産過程による利潤の生産や、諸資本の競争による利潤の分割といった人々の社会的関係から生じる資本の社会的機能が、一定額の価値額を所有すること自体から生じるように見える。

(四) 市民社会と国家の関係

市民社会の諸物神を社会統合力と捉え、市民社会と国家の関係も明確になる。

まず、社会的意識を、観念やイデオロギーといった人間の頭の中に存在するものと同一視せず、物質的な存在である「階級」を、物質的な意識形態と捉え、それが「階級」の現象と捉え、マルクスはそこには人々の直接に社会的な関係は見い出せないことである。諸物象の社会的関係と「階級」の現象とを捉え、マルクスはそこには人々の直接に社会的な関係は見い出せないことである。諸物象の社会的関係と「階級」の現象とを捉え、マルクスはそこには人々の直接に社会的な関係は見い出せないことである。

(五) 国家の「共同性」の形成

市民社会の経済的関係は、人々の社会的関係に他ならないから、市民社会の諸物神を社会統合力と捉え、市民社会と国家の関係も明確になる。

まず、社会的意識を、観念やイデオロギーといった人間の頭の中に存在するものと同一視せず、物質的な存在である「階級」を、物質的な意識形態と捉え、それが「階級」の現象と捉え、マルクスはそこには人々の直接に社会的な関係は見い出せないことである。諸物象の社会的関係と「階級」の現象とを捉え、マルクスはそこには人々の直接に社会的な関係は見い出せないことである。

第四章 市民社会の諸物神と階級

(一) 市民社会の諸物神と階級

そこで問題になるのは、市民社会の経済的関係のうちに、階級支配の様式を発見することである。

すでにわれわれは、第一インターナショナル前文の経済的服

階級の表現形態としての差別

統合が、国家に内属するイデオロギーの力によつてなされるか、如き仮象が確立する。そして、国家に社会統合のイデオロギーの力が宿るよう見えるようになれば、元来政治的国家的原理であつた自由・平等は市民社会の原理のように見えるという転倒が起きる。

こうして、市民社会の原理を自由・平等とみなすイデオロギーが支配的となる。従来土台上部構造の関係をめぐると議論や国家論の多くも、市民社会の原理をとりかへて行なわれていたのだから、その成果は期待すべくもなかつたといふ。

市民社会を支配しているものが諸物象の社会的な自然法則に見えるとするならば、社会批判は政治的領域に移される。革命の政治的精神は、こうして市民社会の諸物神にもつた自然発生的な政治意識となる。他方で社会批判が政治的領域に移されることによつて、階級支配の側から社会の統合を国家的任務とするイデオロギーが被支配階級のイデオロギーによつて補強されることになる。こうして幻想の共同性は、層強化される。

こうして国家の本質を共同幻想に見るイデオロギーも力を得る。共同幻想批判が試みは共同幻想を解体するところか逆にそれを強化することにならざるを得ない。

この思想上の危機から抜け出す道は、国家のイデオロギー的力を市民社会の諸物神という社会統合力が政治に反映したものと捉え、市民社会批判による諸物神の呪縛からの解放、革命の社会的精神の復活によつて、市民社会の統合力を撃つことかからきたかのように見え、社会の

現象として、それが人々の眼には諸物象と見えるので、その経済的関係にもとく経済的服従は物の自然的な社会力への服従に見えるのである。

こうして市民社会の諸物神にとられ、市民社会を自然法則に支配する場と受けとめれば、ここに階級支配の契機を発見することができなくなる。そして市民社会を階級支配の様式とは見ないことこそ、左右を問わずイデオロギー達の支配的な思想なのだが、それもごく当然なことといふ。

こうして、自然物の社会的力としてあらわれ、自然法則のように見える事態を、労働者の経済的服従の物神化と捉え、そうした事態を階級の表現様式と捉えて、このような階級の表現様式に共産主義者の目的意識を適合させる必要が生じている。

さしあつて、差別を経済的服従という今日の労働者階級の階級存在の表現様式と捉えることから出発しよう。

しかしながら人が差異の体系と見るのは、物象の社会的関係が自然物相互の関係に見えるからであり、それは人々の社会関係に他ならなかつた。市民社会の経済的関係に存在している階級支配、階級差別、階級の再生産が諸物神によつて諸物の自然の経済的関係の内属する階級支配、階級差別、階級の再生産に由来する社会意識の内容は、諸物神の外観たる差異の体系と結びついて社会的意識の形態となり、自己を上部構造としてあらわすが、それが差別という社会意識の形態に他ならない。

差別を経済的服従という労働者階級の階級存在の表現様式と捉える、ということはいふことである。

◎RG資料集第1集
—九回大会RGから—
12・18ブントへ—
◎RG資料集第2集
—4・28闘争から—
九回大会へ—

政治的國家と市民社会との関係において、この転換が明らかに見られるという点で、政治的

(五) 政治的國家と宗教

マルクスは、政治的國家と宗教とのちがいで展開する「人間は、宗教を公法から私法へ追いやることによって、自分分を宗教から政治的に解放する。宗教はもはや國家の精神ではなく、市民社会の精神、すなわち利己主義の領域、万人の万人にたいする戦いの領域の精神となつてゐる。宗教はもはや共同の本質ではなくて差別の本質である。それは、共同体からの、自分と他の人間とのちがいで、人間の分離の表現となつてゐる。これが宗教のもともとの姿であつたのだ。」(同前、三九四頁)

(六) 國家批判から市民社会批判へ

以上、マルクスによる宗教批判の方法を適用した政治的國家と市民社会の分裂の下で、批判に内在してきたが、これまで追つてきた事柄をふまれば、法的諸關係ならびに國家諸形態が「それ自体からも、またいわゆる人間精神の一般の發展から理解できるものではなく、むしろ物質的な諸生活關係に根ざしてゐる」という見解に到達しえた事情がはつきりするであらう。

(七) 宗教の人間の基礎の現世化としての市民社会

政治的國家の宗教性を、その「現世的な構造」の分析によつて明らかにしたマルクスは、しかし、マルクスは宗教の成員が宗教にとらわれてゐる、という意味での政治的國家の宗教的欠陥についての批判には進めなかつた。この批判を進むために、

国家は宗教的であるが、しかしそれは宗教ではない。国家は政治的國家と市民社会との分裂を指している理解してはじめて意味をもち、そしてこのような國家では「完成された政治主義をもつてゐる不完全さが宗教となつてあらわれる。」(同前、三九五頁) というよう

だが、宗教的精神が現世的に現世化されることはできもしないことである。なぜなら、宗教的精神自体、人間精神の発展段階の非現世的な形式以外のなんでもあらうか? 宗教的精神が現世化されることすれば、それはただ、宗教的精神によつて宗教的に表現されてゐた、人間精神の發展段階が、その現世的な形式であらわされて確立される場合に過ぎない。このことは民主的國家でなされるキリスト教ではなく、キリスト教の人間の基礎がこの國家の基礎である。宗教はこゝでもその成員の観念的な非現世的な意識として存続する。なぜならそれは、その國家において實現される人間の發展段階の観念的な形式であるから。(同前、三九七頁)

政治的國家の成員が依然として宗教にとらわれてゐること、この政治的國家の宗教的欠陥の本質は、政治的國家が完成したキリスト教國家であることにあるのだが、この完成したキリスト教國家は、宗教的精神の現世化を意味するわけではない、とマルクスは見ている。

政治的國家の成員が依然として宗教にとらわれてゐること、この政治的國家の宗教的欠陥の本質は、政治的國家が完成したキリスト教國家であることにあるのだが、この完成したキリスト教國家は、宗教的精神の現世化を意味するわけではない、とマルクスは見ている。

今日、市民社会論者たちに共通する思想的立場を簡明に表明したのが平田清司であった。平田は「市民社会と社会主義」で「社会概念としてマルクスに存在したものは、商品経済社会や資本主義社会ではなく、「市民社会」と「資本家社会」である(五一頁)と、社会概念が「この二つのものだからこそ、社会の經濟過程の形態規定が、政治的・道徳的過程の形態規定を規制するものとして、はじめから指定されるのである。經濟的・政治的・道徳的過程の共同的發展としての社会形成、これをこそ、市民社会の資本家社会への転換の過程として、マル

マルクスは宗教的精神について「現世的な構造」の分析によつて明らかにしたマルクスは、しかし、マルクスは宗教の成員が宗教にとらわれてゐる、という意味での政治的國家の宗教的欠陥についての批判には進めなかつた。この批判を進むために、

(八) 今日の市民社会論批判

七〇年代以降市民社会論がブームとなり、種々の市民社会論が登場した。しかし市民社会論とは何ぞいふものか、おおよそ理論的であるが、しかしこの種の市民社会論が、大衆の日常意識において、階級概念が空洞化してきてゐることの軌を一にしてブームとなつたことに注意しておく必要があるであらう。

マルクスは、政治的國家の宗教性、すなわちキリスト教を基礎とし、宗教として信奉し、したがつて他の宗教にたいして排他的にふるまう國家が、キリスト教國家の完成であるのではなく、むしろ無神論的國家、民主的國家、宗教を市民社会のほかに諸要素といふよにしようとする國家がそれなのである。……いわゆるキリスト教國家は、自己の政治的完成のために、キリスト教を必要とする。民主的國家、現世的國家には、宗教を必要としない。この國家においては、宗教の人間基礎が現世的な仕方では表現されてゐる。國家はむしろ宗教を度外視することが出来る。」(同前、三五五頁)

第五章 マルクスの市民社会論

第三節 市民社会美化論の批判

(一) 平田 田 説

今日、市民社会論者たちに共通する思想的立場を簡明に表明したのが平田清司であった。平田は「市民社会と社会主義」で「社会概念としてマルクスに存在したものは、商品経済社会や資本主義社会ではなく、「市民社会」と「資本家社会」である(五一頁)と、社会概念が「この二つのものだからこそ、社会の經濟過程の形態規定が、政治的・道徳的過程の形態規定を規制するものとして、はじめから指定されるのである。經濟的・政治的・道徳的過程の共同的發展としての社会形成、これをこそ、市民社会の資本家社会への転換の過程として、マル

マルクスは、政治的國家の宗教性と宗教が市民社会の精神となつてゐることの二方面から、政治的國家の成員が宗教的となつてゐることを説いている。しかし宗教批判の方法にもとづかならば、政治的國家の宗教性たる成員の二重生活とそれによつて、人間と人間の分離と疎遠の表現であるかぎり、宗教的である。政治的民主主義はキリスト教的である。」(同前、三九八頁)

今日、市民社会論が成果をあげてゐない、というこの理由については、マルクスの市民社会論批判が、政治的國家に対する政治的批判の完成といふことを前提としてなされてゐることを明らかにしてきた後では明白である。また、階級概念の空洞化といふ事態の下では、プロレタリアートの階級意識をつくりあげていくうえで、政治や宗教といふ社会意識の形態を批判することは不可欠の作業となつてゐる。

宗教が市民社会の精神となつており、市民社会が宗教の人間の基礎の實現としての意義をもつてゐるならば、まさに、市民社会批判の前提に宗教の批判がおかれなければならない、ということも今日でも真理なのである。

「それはまず、特定の交通様式として把握される。市民社会は何よりもまず、交通的社会としてある。それは、「私的諸個人」が対等な所有権者として自由に(交換)しあふ社会である。」(五六頁)

「近代市民社会において私的所有におかれたい個人の所有が、いま、資本家の所有の、さらには私的所有一般の否定によつて、ふたたび指定されるのである。……近代市民社会において、私的形態によつて歪曲されてゐる労働人民の個性性、個別的労働・個別的所有が、いま、市民社会において、真実に開花しようとするのである。」(一〇三頁)

「近代市民社会において私的所有におかれたい個人の所有が、いま、資本家の所有の、さらには私的所有一般の否定によつて、ふたたび指定されるのである。……近代市民社会において、私的形態によつて歪曲されてゐる労働人民の個性性、個別的労働・個別的所有が、いま、市民社会において、真実に開花しようとするのである。」(一〇三頁)

(二) 望月 説

平田の市民社会論は、結局は社会主義論として展開されてゐる。そのせいか、市民社会の理論として自ら説いてゐる価値形態論にはこゝでとりあげるほどの理論内容がない。

他方、価値形態論には手をつけてゐないが、市民社会論を歴史理論として、平田よりもより詳細に展開したのが望月清司であった。

望月は「市民社会の復権要求」とは、ゲゼルシャフト化された人格的關連の回復要求であり、そのかぎりにおいて将来のゲマインシャフトの譲るべからざる「自由人の連合」構造をもち、はじめ眺望してゐるものといふよう。(「マルクス歴史理論の研究」六一三頁) というように、今日の労働者階級が「市民社会の復権要求」をもつてゐることの要求は、将来の共産主義社会の構造をもちかじめ眺望してゐるものと見てゐるのだから、平田よりも一層ブルジョア的である。望月は、マルクスの歴史理論のなかには「三重層の市民社会規定」があるといふ。

一つめは歴史貫通的な、全歴史の真のなかまど、生産と交通から直接に展開される社会的組織としての市民社会。二つめは等価交換原理に保障された同格の市民の交通がある商品交換者の社会としての市民社会。三つめは、二つめの社会が転回された資本家社会としての市民社会。(六〇九頁)

「近代市民社会において私的所有におかれたい個人の所有が、いま、資本家の所有の、さらには私的所有一般の否定によつて、ふたたび指定されるのである。……近代市民社会において、私的形態によつて歪曲されてゐる労働人民の個性性、個別的労働・個別的所有が、いま、市民社会において、真実に開花しようとするのである。」(一〇三頁)

か見えないことを示しているという点があげられる。次に、労働に應じた分配が平等な権利である、といつても、まだブルジョアの制約を負つており、それは、平等が労働で測られてゐる、というように、本来、ブルジョアの権利があるといふことは、社会主義社会の欠陥として把握されるべきであるのに、この欠陥が美化されるに至つてゐる。

平田の市民社会論は、結局は社会主義論として展開されてゐる。そのせいか、市民社会の理論として自ら説いてゐる価値形態論にはこゝでとりあげるほどの理論内容がない。

他方、価値形態論には手をつけてゐないが、市民社会論を歴史理論として、平田よりもより詳細に展開したのが望月清司であった。

望月は「市民社会の復権要求」とは、ゲゼルシャフト化された人格的關連の回復要求であり、そのかぎりにおいて将来のゲマインシャフトの譲るべからざる「自由人の連合」構造をもち、はじめ眺望してゐるものといふよう。(「マルクス歴史理論の研究」六一三頁) というように、今日の労働者階級が「市民社会の復権要求」をもつてゐることの要求は、将来の共産主義社会の構造をもちかじめ眺望してゐるものと見てゐるのだから、平田よりも一層ブルジョア的である。望月は、マルクスの歴史理論のなかには「三重層の市民社会規定」があるといふ。

一つめは歴史貫通的な、全歴史の真のなかまど、生産と交通から直接に展開される社会的組織としての市民社会。二つめは等価交換原理に保障された同格の市民の交通がある商品交換者の社会としての市民社会。三つめは、二つめの社会が転回された資本家社会としての市民社会。(六〇九頁)

「近代市民社会において私的所有におかれたい個人の所有が、いま、資本家の所有の、さらには私的所有一般の否定によつて、ふたたび指定されるのである。……近代市民社会において、私的形態によつて歪曲されてゐる労働人民の個性性、個別的労働・個別的所有が、いま、市民社会において、真実に開花しようとするのである。」(一〇三頁)